千葉大学教育学部研究紀要　第62巻　329～335頁（2014）

専門力を基盤とした「連携・コーディネート力の向上」を目指す養護教諭研修プログラムとその評価

岡田加奈子[1)]　山田響子[1)]　工藤宣子[1)]　岩﨑順子[2)]
國吉正彦[3)]　酒井一成[4)]　朝倉隆司[5)]　竹鼻ゆかり[5)]
三村由香里[6)]　松枝睦美[6)]　上村弘子[6)]　齊藤理砂子[7)]
鎌塚優子[8)]　小橋暁子[1)]　佐瀬一生[1)]　高橋浩之[1)]
花澤　寿[1)]　藤川大祐[1)]　茂野　恵[9)]　須貝仁美[10)]

[1)]千葉大学教育学部　[2)]千葉県教育委員会　[3)]千葉県総合教育センター　[4)]千葉県立生浜高等学校
[5)]東京学芸大学　[6)]岡山大学　[7)]聖学院大学　[8)]静岡大学　[9)]新潟市立潟東南小学校
[10)]千葉県立柏特別支援学校

Evaluation of the Education Program about development of cooperation skill based on the specialty for Yogo teacher

OKADA Kanako[1)]　YAMADA Kyoko[1)]　KUDO Noriko[1)]
IWASAKI Jyunko[2)]　KUNIYOSHI Masahiko[3)]　SAKAI Kazunari[4)]
ASAKURA Takashi[5)]　TAKEHANA Yukari[5)]　MIMURA Yukari[6)]
MATSUEDA Mutsumi[6)]　KAMIMURA Hiroko[6)]　SAITOU Risako[7)]
KAMAZUKA Yuko[8)]　KOBASHI Satoko[1)]　SASE Kazuo[1)]
TAKAHASHI Hiroyuki[1)]　HANAZAWA Hisashi[1)]　FUJIKAWA Daisuke[1)]
SHIGENO Megumi[9)]　SUGAI Hitomi[10)]

[1)]Chiba University　[2)]Chiba Prefectural Board of Education　[3)]Chiba General Education Center
[4)]Oihama High School　[5)]Tokyo Gakugei University　[6)]Okayama University　[7)]Seigakuin University
[8)]Shizuoka University　[9)]Katahigashi minami elementary school　[10)]Kashiwa special-needs education school

子どもたちの健康課題は多様化し，学校の教職員全員で取り組まなければならない様々な健康・発達課題が増加している。それゆえ，中央教育審議会答申等においても言及されているように，養護教諭は「連携のコーディネーター」として，これまで以上に期待が高まっている。そこで，専門力を基盤とした「連携・コーディネーター力の向上」を目指す養護教諭研修プログラムを開発，実施した。2012年に開発した本研修プログラムは，参加者の満足度が高かった等，肯定的に受け止められた。

キーワード：養護教諭（Yogo teacher）　連携・コーデイネート力（cooporation skill）　研修（Education Program）　評価（Evaluation）

Ⅰ．はじめに

子どもたちの健康課題は多様化し，学校の教職員全員で取り組まなければならない様々な健康・発達課題が増加している。中央教育審議会答申（2008）では，子どもをとりまく現代的な健康課題に対応するために，養護教諭は，学校保健に関する学校内の組織体制の中核的な役割を果たしていると指摘された。

教育職員養成審議会第３次答申（1999）では，初任の養護教諭にあっては，救急処置等を実施できる力量を，中堅の養護教諭には，保健室経営，組織的な学校保健の推進の力を求めている。このような背景の中，養護教諭は「連携のコーディネーター」としてこれまで以上に期待が高まり，これらに関する研究も行われている[1)2)]。しかし，「連携のコーディネーター」に関わる能力については，免許取得前の養成段階では，養成機関で開講されている授業科目等から見ても，それに特化した，実践的な能力を育てる教育はほとんど行われておらず[3)]，さらに，養護教諭として勤務した後もそれらの研修はほとんど行われていない状況である。

そこで，これらの力を養成する研修のプログラムを大学と教育委員会と合同で開発し，実施することにした。ただ，連携・コーディネート力といっても，専門的な能力のない者は，信頼されない。つまり連携という視点で考えても，第一義的に必要な能力は，専門的な能力で，その中でも救急処置能力，中でも近年フィジカルアセスメントのニーズが高い[4)]。

そこで，専門力を基盤とし，さらに連携・コーディ

連絡先著者：岡田加奈子

ネート力を高める研修プログラムを開発しようとした。連携・コーディネート力を育成するうえでは，連携する様々な関係職種の専門家が必要と考え，本プログラムでは，教育学部の様々な専門のメンバーが参画し，専門力を基盤とした連携・コーディネート力の向上を目指す養護教諭研修プログラムを開発した。本論では，開発した本研修プログラムを評価し，今後の方向性を検討することを目的とする。

具体的には，研修修了時の受講生による研修に対する満足度と意見，さらに連携に対する理解・取り組み意欲等で評価を行った。

Ⅱ．方　　法

１．【研修１】（２日間コース）平成24年7･8月実施

対象は，自分自身で参加を希望し，原則２回の研修両方に参加する養護教諭で，実際には１回のみ参加した者がいたため，１回目参加者36名，２回目参加者は30名，１，２回参加者は，のべ66名であった。実施時期は，平成24年７月と８月の各１日，２日間であった。評価は，各研修後の２回の質問紙調査によって行った。

調査では，各実習・演習と全体に対しての満足度，（選択肢「①満足」「②おおむね満足」「③どちらでもない」「④あまり満足していない」「⑤全く満足していない」）ならびに意見・感想・要望等を自由記述で尋ねた。

２．【研修２】（1日間コース）平成24年12月実施

対象は　養護教諭93名，指導主事等５名の計98名であった。実施時期は，平成24年12月で，１日間研修のニーズが高かったために１日間のコースとした。評価は，研修後に質問紙調査によって行った。

調査では，【研修１】の内容に加えて，連携に対する取り組みの意欲等を尋ねた。

Ⅲ．研修プログラムの内容

１．プログラムの概要

本研修プログラムの目的は，「連携・協働」に関しての理解を深め，前向きに取り組めるようになることである。

研修プログラムでは，【研修１】においては，専門力の一つであり，現在ニーズの高い「フィジカルアセスメント」を取り上げた。表１に示すような６つのプログラム（講義，講演，チームビルディング[5]，ケースメソッド教育[6]，フィジカルアセスメント[7]，振り返り・シェアリング）から構成し，期間を約１か月開けて，２回目を行った。講義（１・２回目）と講演（２回目）は，全員を対象に一斉に行い，演習・実習は，人数を半分に分けて行い，参加者は，チームビルディングは２回（１・２回），ケースメソッド教育とフィジカルアセスメントは各１回（１回目または２回目のいずれか）受講した。

【研修２】は，１日コースであったため，フィジカルアセスメント[7]，講演を除いた，講義，チームビルディング[5]（時間は，【研修１】の約半分），ケースメソッド教育[6]，振り返り・シェアリングで構成した。

表１　「専門力を基盤とした連携・コーディネート力の向上」を目指す養護教諭研修プログラム〈概要〉

【研修１】（２日間コース）
１回目　研修プログラム
講義：概論
演習・実習：（各２時間）
　１．チームビルディング（１回目）
　２．ケースメソッド教育又はフィジカルアセスメント
振り返り・シェアリング

２回目　研修プログラム
講義：概論
講演：保護者・地域の立場からの連携・協働
演習・実習：（各２時間）
　１．チームビルディング（２回目）
　２．ケースメソッド教育又はフィジカルアセスメント
振り返り・シェアリング

【研修２】（１日間コース）
講義：概論
演習・実習：（各２時間）
　１．チームビルディング又はケースメソッド教育
　２．ケースメソッド教育又はチームビルディング
振り返り・シェアリング

２．各プログラムの内容

１）【研修１】２日間コース

⑴　講義　１・２回目

連携・コーディネート力についての，基本的な知識について講義を行った。

⑵　講演　２回目

学校を通じて，町育て，子育てを行う融合という概念を推進し，秋津コミュニティの立役者となった，岸裕司氏にご講演を頂いた。

⑶　演習・実習

実践的な能力を向上させるため，ケースメソッド教育やフィジカルアセスメントの具体的演習・実習形式を導入した。

①　チームビルディング　１・２回目

１回目は「連携・コーディネート力を考える」，２回目は「効率的に連携できるチームの作り方」というテーマで，グループ演習を含めて実施した。参加者は基本的には２回受講した。

②　ケースメソッド教育　１回目，または２回目

ケースメソッド教育とは，参加者が判断や対処を求められる模擬ケースを教材に，討論しながら当事者の立場に立って，自分ならばどのように行動すべきかを判断できるようになることを目的とする参加型，問題解決型の総合的実践能力の基礎を養う学習方法である[8]。連携・協働をテーマとしたケースをもとに，討論することにより，そのケースの課題を見抜いたり，や自分ならどのように連携するのかといった視点が育てられたりすると考えられる。

そこで，本研修では，１回目は主に小・中学校に勤

務する養護教諭を対象に，連携・協働をテーマにした小学校用ケースを，２回目は，主に高等学校に勤務する養護教諭を対象に，同様のテーマで，高等学校用のケースを用いて行った。２つのケースは，本研修のために開発した。研修は，自己学習→グループ学習→全体討議の順に実施した。

③　フィジカルアセスメント　１回目，または２回目

前述したように連携・コーディネート力といっても，専門的な能力のない者は，信頼されない。つまり連携という視点から考えても，養護教諭にとって第一義的に必要な能力は，専門的な能力で，その中でも救急処置能力，中でも近年フィジカルアセスメント能力が最も注目されている[9]。

そこで，本研修では，「腹痛」事例を用いたフィジカルアセスメントを取り入れた。中でも，講義と小グループでの実習を取り入れて行い，各日３名の講師が担当した。

⑷　振り返り・シェアリング　１・２回目

各回の最後には，５グループに分かれて，各グループには，ファシリテーターを加えて，振り返り・シェアリングを行った。

２）【研修２】（１日間コース）

表１に示したように，講義，ケースメソッド教育[6]，振り返りは同じ内容で，チームビルディング[5]は，【研修１】の評価を踏まえて検討を行い，約半分の時間と内容で行った。フィジカルアセスメントと講演は実施しなかった。

Ⅳ．結　　果

１）参加者の特性

【研修１（１回目）】と【研修２】の参加者の勤務校種は表２，経験年数は表３に示した。

参加者では21～30年の経験年数の者が約４割と多かった。

２）各演習・実習並びに研修全体に対する満足度

⑴　「ケースメソッド教育」「フィジカルアセスメント」に対する満足度（図１）

【研修１】の「ケースメソッド教育」「フィジカルアセスメント」に対する満足度は，１～２人を除いて，「１．満足」「２．おおむね満足」と，肯定的な意見であった。両演習・実習とも「１．満足」が約６割であった。

表２　参加者の勤務校種

校　　種	人数（%）	
	【研修１（１回目）】	【研修２】
１：小学校	13(36.1)	36(36.7)
２：中学校	5(13.9)	27(27.6)
３：高等学校	13(36.1)	26(26.5)
４：特別支援	2(5.6)	6(6.1)
５：その他	3(8.3)	3(3.0)
計	36(100)	98(100)

表３　参加者の経験年数

経験年数	人数（%）	
	【研修１（１回目）】	【研修２】
１：１年	2(5.6)	4(4.1)
２：２～５年	9(25.0)	7(7.1)
３：６～10年	5(13.9)	13(13.3)
４：11～20年	1(2.8)	20(20.4)
５：21～30年	15(41.7)	38(38.8)
６：30年以上	4(11.1)	13(13.3)
７．未記入	0(　0)	3(3.1)
計	36(100)	98(100)

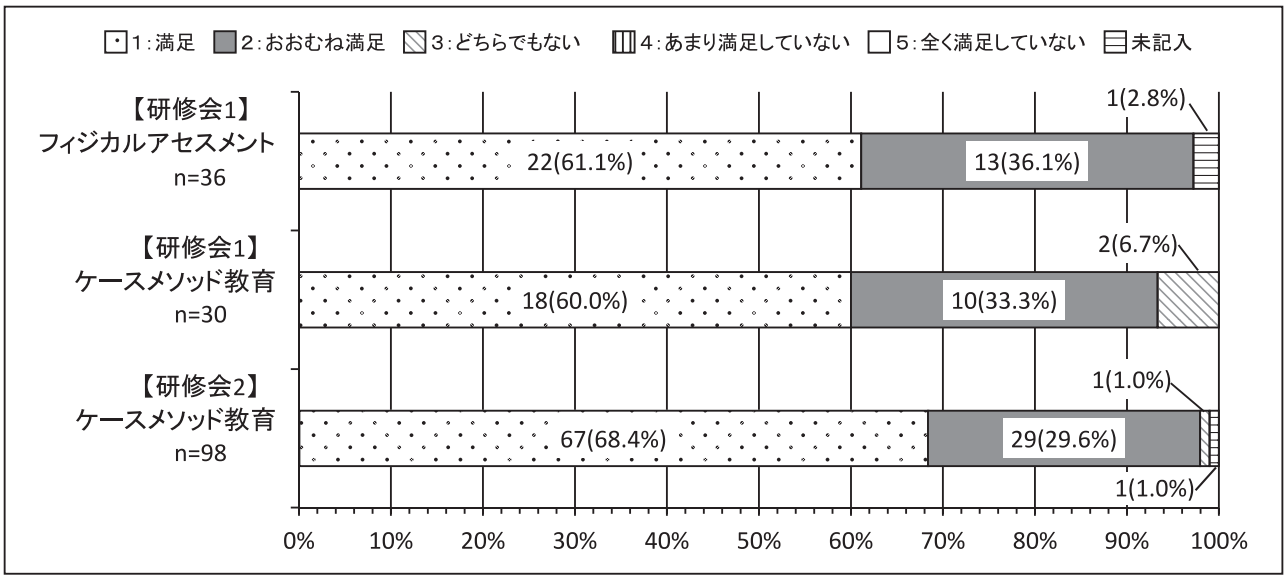

図１　フィジカルアセスメント，ケースメソッド教育に対する満足度

また，【研修２】では，２人を除いて，「１．満足」「２．おおむね満足」と，肯定的な意見であった。また，67人（68.4％）が「１．満足」と答えていた。

⑵「チームビルディング」に対する満足度（図２）

「チームビルディング」に対する満足度は，【研修１】の１回目の研修では「１．満足」が13人（36.1％），「２．おおむね満足」が20人（55.6％）と，肯定的な意見の者が多かった。２回目の研修では「１．満足」が13人（43.3％），「２．おおむね満足」が12人（40.0％）と，１回目同様肯定的な意見の者が多かった。ただし，「ケースメソッド教育」「フィジカルアセスメント」に比べると，「１．満足」と答えている者が少なかった。

しかしながら，４か月後に実施した【研修２】では１日間コースであるが，57人（58.2％）が，チームビルディングに対し，「１．満足」と答えており，【研修１】より多かった。

⑶　研修会全体に対する満足度

研修会全体に対する満足度は，図３に示したように，【研修１】の１回目の研修では「１．満足」が22人（61.1％），「２．おおむね満足」が13人（36.1％）と，未記入の１名を除いて肯定的な意見であった。

２回目の研修では「１．満足」が21人（70.0％），「２．おおむね満足」が９人（30.0％）と，全員が肯定的な意見であった。【研修２】では，「１．満足」が70.4％で，２名を除いて，肯定的な意見であった。

２）【研修２】研修修了時の連携・協働の取り組みへの意欲等（図４）

【研修２】が修了した時，連携・協働への理解の深まりについて，質問を行った。その結果，70人（71.7％）の者が深まったと答え，３名を除いて，肯定的な意見であった。次に連携・協働に前向きの取り組もうと思ったかという質問に対しては，84人（85.7％）の者が，「１．やや思った」と答え，３名を除いて，肯定的な意見であった。さらに，連携・協働の向上をめざすヒントが得られたかという質問に対しては，76人（77.6％）の者が，「１．得られた」と答え，２名を除いて肯定的な回答であった。

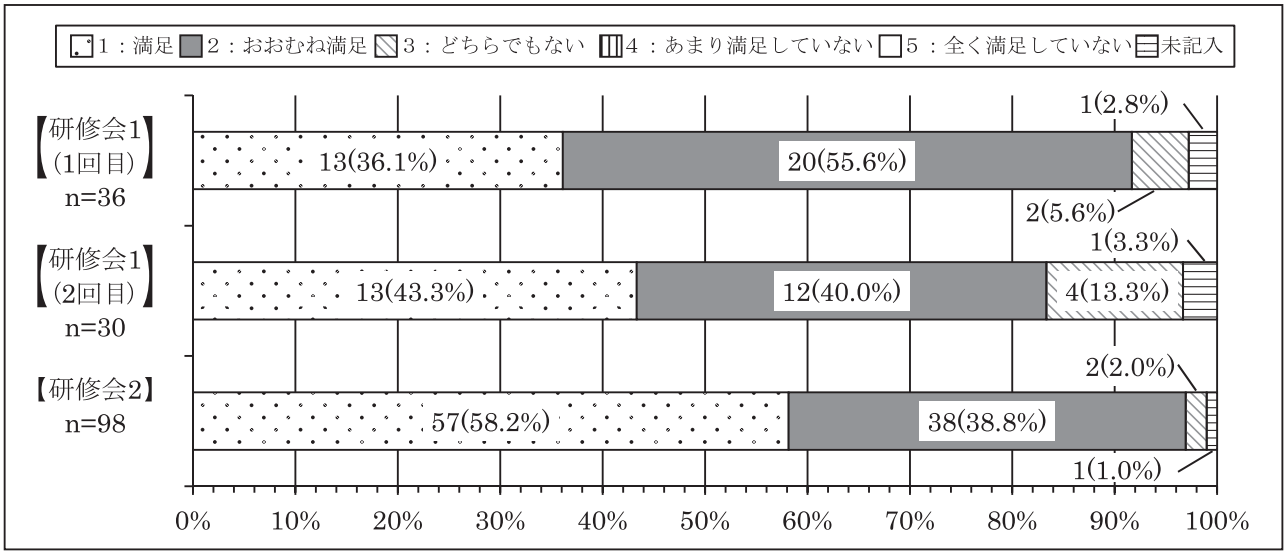

図２　チームビルディングに対する満足度

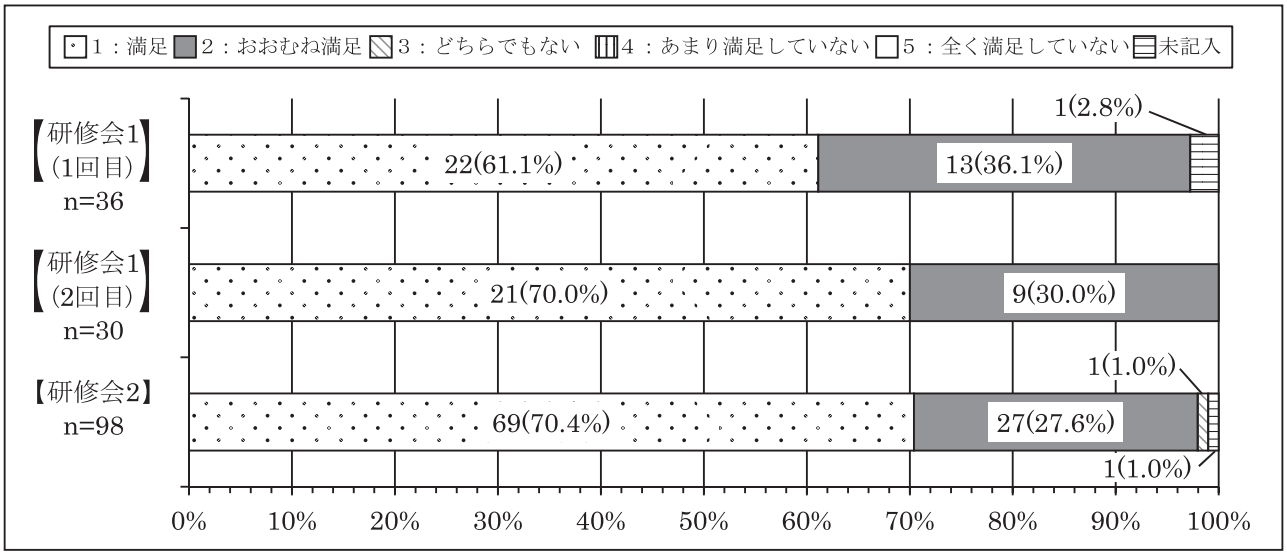

図３　研修会全体に対する満足度

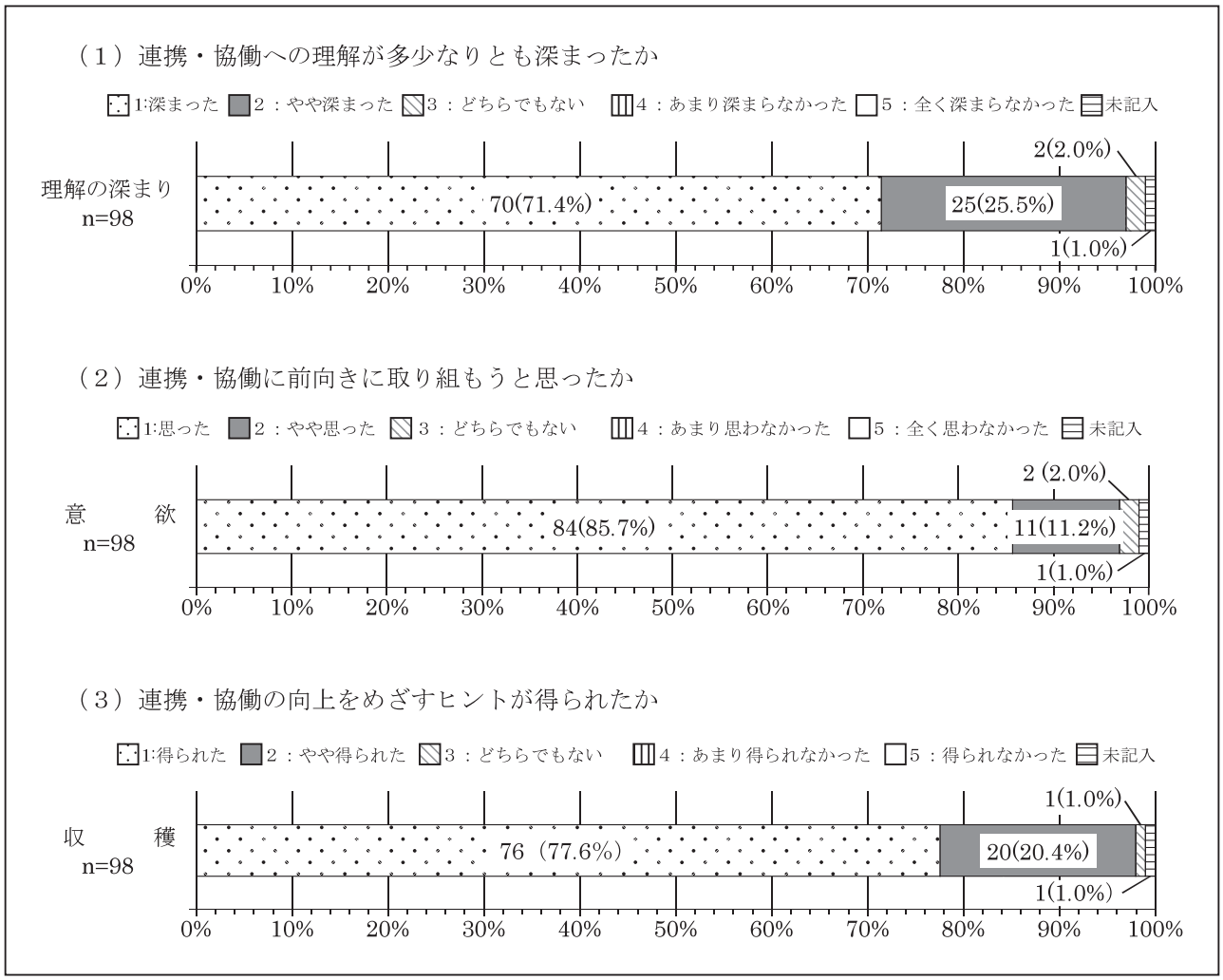

図４　研修終了時の連携・協働の取り組みへの意欲等【研修会２】

３）【研修１】に対する感想・意見などの自由記述

⑴　研修全体

【研修１】の終了時のアンケートには１．２回の研修を通じて，のべ55個の意見等が記述された。

もっとも多かったのは【満足・充実】についてで，26個の意見が述べられた。他に最後の振り返りの時間で他の養護教諭と研修を振り返り，実践を交流したことに対する肯定的意見が15個記述されていた。

⑵　講演（表４）

２回目の研修終了時の質問紙調査で，講演に対する意見・感想を自由記述で求めたところ，質問紙調査の自由記述には，２回目に実施した講演に対して，「これからの教育は子どもを中心に据えて，地域住民も巻き込んだ視点で行っていかなければならないと痛切に感じた」など，気づき，再認識したという意見が10個，「融合という考え方」など新鮮だったという意見が６個，DVDを見て感動したなどの意見が６個と多くの記載がなされていた。

５．考　　察

【研修１】の３つ，【研修２】の２つの演習・実習については，質問紙調査でも，「①満足」「②おおむね満足」と答えている者が多かった。しかしながら，【研修１】では，「①満足」と答えている者は，ケースメソッド教育とフィジカルアセスメントが両方とも約６割に対し，チームビルディングは１回目36.1%，２回目43.3%，【研修２】ではケースメソッド68.4%に比べて，チームビルディングでは58.2%と，チームビルディングがやや「①満足」と答えた者が少なかった。

これは，「ケースメソッド教育[9]」と「フィジカルアセスメント」は以前より開発を行っている研修プログラムであり，それらの基礎のうえに，本研修に合う形で再構築を行っており一方，「チームビルディング」は，今年から開発を始めた方法・内容であるため，その差が出たと考えられた。【研修１】を踏まえて改善を行った【研修２】では，「チームビルディング」を１回実施のみにしたにもかかわらず，「①満足している」が58.2%と高くなっていた。

また，ケースメソッド教育も「①満足」が68.4%と【研修１】よりも多くの者が「①満足」を選んでいた。

研修会の結果を踏まえて，さらに検討を行うほど，受講者の満足度が高まるという可能性が示唆された。

また，研修全体に対する満足度は，ほとんどが肯定的であったが，【研修１】では，２回目のほうが「①満足」と答えたものが多かった（１回目61.6%，２回目70.0%）。その理由として，自由記述で肯定的な意見が「講演」に

表４　講演に対する感想

気づき・再認識 ［10個の意見］	【連携の必要性への気づき：７人】 ・理念としては難しいことではないが，地域の中で核になる方が必要なのだと思った ・最初の立ち上げが大変だろうが，定着するととても楽しい学校になると感じた ・地域に開かれた学校の意味を理解することができた ・DVDで○○小での実践を観て，地域で子どもを育てていく大切さを理解することができた。自尊感情を育てられている子どもの成長がよく分かりよかった。 ・DVDを観て子どもたちがとても生き生きと過ごしているが伝わり，地域との関わりの大切さを改めて実感した ・これからの教育は子どもを中心に据えて，地域住民も巻き込んだ視点で行っていかなければならないと痛切に感じた ・前々任校で校長が地域のボランティアを多く要請したことがあるが，このような意図があったのだと改めて認識した。現在の勤務校では，自尊感情の低い子どもが多く，地域の力を取り入れることの大切さを初めて理解できた 【今後どのような実践をすべきかについての気づき：１人】 ・保護者，地域の方が学校に来る機会を増やしていけたら関係も作りやすく，問題解決のための支援体制も作りやすいのでと感じた 【その他：２人】 ・タテとヨコのつながりを大切にすることで無理なく楽しく生涯学習できると知った ・学校職員は指定研究が終わればそれっきりということが多いが，数値で表すということは私たちが人を説得する，動かす技法として必要と感じた
新　　鮮 ［６個の意見］	【融合について：３人】 ・融合＝win&winの考えが新鮮 ・融合という発想がとてもすごいと感じた ・学校，地域との連携をどのように図っていけばよいのか，連携ではなく融合であるという言葉が印象的だった 【連携について：３人】 ・「チームを作る時に，まず３名の仲間から始める，さらに目標を共にした人を誘って６名にしていく，そしてサークルを作る」という考えがとても新鮮 ・地域との関わり方にはこのような形もあるのだと分かり，新鮮だった ・養護教諭の連携よりも枠の大きい学校全体の連携の話を聞けてとても新鮮だった。生涯学習において学校を拠点とした活動は新しい視点で勉強になった
感動・驚き ［６個の意見］	・企業で務められていて，志の高い方の講演は説得力があり，感動した ・秋津小の実態をDVDで観て大変感動した ・学校，地域，家庭の連携，生涯学習の過程を観ることができ感動した ・学校職員以外が追跡調査を行っていることに驚いた ・地域とのつながりの大変強い取り組みはとても素晴らしいと感じた ・現在の学校はスモールスクールで地域のボランティアの方が多く来て下さるが，授業に入ってもらうことは少ない。一緒に50時間以上というのは驚きだった
満足・充実 ［４個の意見］	・地域（保護者）の視点で話を聞けてよかった ・とても楽しかった ・とてもよかった ・とても面白い話で惹きこまれた
きっかけ・ 意欲向上 ［３個の意見］	・地域の中の学校の役割について改めて考えるいい機会になった ・現在，コミュニティスクールを立ち上げているところで，どのように家庭，地域とつながっていくのか，これからどう変わっていくのか考えるきっかけになった ・身の回りですでに動き始めている継続する支援を自分では何ができるか今後，考えていきたい
参　　考 ［２個の意見］	・DVDが実践的で参考になった ・「地域との連携」はよく言われるが具体的なイメージが今までつかめなかった。１つのモデルとして，とても参考になったし刺激も受けた
困　　難 ［１個の意見］	・私立で同じようなことをするのは難しく感じた
そ の 他 ［５個の意見］	・岸先生のような人を発掘発見したい ・コミュニティスクールについて大変興味がある。地域の人的資源の発掘 ・連携・融合についてうなずく部分が多かった ・学校全体で話を聞けたら，学校が変わるだろうと思った。ボランティアは来てくれているが，職員の意識を変えたらもっと来るだろうと思う ・ボランティアとのトラブルが多く相談したい
要　　望 ［６個の意見］	【時間：４人】 ・もう少し時間があれば，具体的な内容を紹介してほしかった ・もう少し時間をかけてゆっくり聴きたかった：２人 ・時間が足りなくてもったいない。後半の内容の方が聴きたい内容だったと思う 【内容：２人】 ・学校と地域との連携の，初めの一歩が一番大変だったと思うのでまた詳しく聴きたい ・地域の方にやりがいを感じてもらうために学校はどうしたらよいのか，その辺のポイントを知りたい

【　】内の数字は，記述数

ついて多かったことから，それが理由の一つとして考えられた。具体的に「連携・協働の実践」事例を講演していただくことは，重要と考えられた。しかし，一方で【研修２】では，講演を行わなかったが，「①満足」と答えたものが，70.4％と【研修１】の２回目とほぼ同じであった。

事例についての講演ができなかった場合でも，各プログラムの満足度が高ければ，全体の満足度が高まると考えられた。また，図４に示したように，理解や前向きに取り組む意欲，ヒントの入手なども，肯定的な意見が多かった。

以上のように開発した，専門力を基盤とした「連携・コーディネーター力の向上」を目指す養護教諭研修プログラムは，おおむね肯定的な意見が多く，満足度の高い研修であったといえる。しかしながら，さらに満足度を高めるためには，チームビルディングを中心に，さらに検討を加えて，改善していく必要が考えられた。

謝　辞

本研究は，2012年度独立行政法人教員研修センターの「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」の助成を受けて実現しました。心から御礼申し上げます。

引用文献

１）長谷川久枝，竹鼻ゆかり，山城綾子：小学校における保健室登校の連携を成立させる要因と構造，日本健康相談活動学会，6(1)，55-70，2011
２）下川清美，津島ひろ江：医療的ケアにおける養護教諭のコーディネーション過程と必要な能力―特別支援学校の養護教諭を対象に―，日本養護教諭教育学会，14(1)，33-43，2011
３）日本養護教諭養成大学協議会：事業活動報告書（2011年），2012
４）岡田加奈子：研修どうでしょう　集計結果から見る養護教諭の意識と実態，4-7，健康教室，63(13)，2012
５）山田響子：チームビルディング，学校の組織体制をどのように作っていくか，76-85，健康教室，63(13)，2012
６）竹鼻ゆかり：意思決定力・問題解決力を向上させるケースメソッド教育，24-39，健康教室，63(13)，2012
７）三村由香里：フィジカルアセスメント能力を高める研修，32-39，健康教室，63(13)，2012
８）岡田加奈子：竹鼻ゆかり，教師のためのケースメソッド教育，少年写真新聞社，2011
９）千葉大学教育学部ケースメソッド教育カリキュラム開発プロジェクトチーム：教員のためのケースメソッド教育，2009